



Title	Richard II における「王」という名前についての一考察
Author(s)	小島, 裕子
Citation	Osaka Literary Review. 1988, 27, p. 48-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25552
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Richard II における 「王」という名前についての一考察

小 島 裕 子

劇の前半部において、すでに後半部の展開まで明確に予想のついてしまう *Richard II* において、我々を飽かすことなく魅きつけるものは、まさに Richard の崩壊の過程そのものである。歴史劇でありながら、Bolingbroke と Richard という 2 つの権力の間に拮抗の状態が見られないために、権力の移行の過程には興味は注がれない。観客の興味の対象は、Richard II の “history” であり、イギリスや、イギリス国民の “history” ではないのである。

多くの批評家達にとって、王という重い役割を全うし切れなかった、欠点だらけの弱い Richard はいかにも情け無い、救いようのない存在であった。しかし、この劇全体を支配しているのは、その Richard に他ならない。Richard が一身に欠点を背負いながらも我々を魅了するのは、彼が苦悩のなかで「王」たることについて、更に自分が何者であるか認識することによって、精神的な成長を遂げ、その過程において、断然他の登場人物を圧倒するエネルギーを放出するからである。

「王」であることについての欠点のかたまりの様な存在から始まった Richard は、「王」についての考察を抜きにしては変化を遂げられない。実際、Richard は幾度も「王」という名前について自ら言及するが、そのたびに、Richard の中にある変化が生じている。また、他の主要な登場人物も「王」について、様々な認識を抱いているが、それらは、結果的にではあるが、Richard を押し上げるベクトルを持っているように思われる。

中世以来の伝統的な「王」についての認識については、今尚その価値を失わぬ *The King's Two Bodies* の中で Kantorowicz が詳細に述べている。

彼は *Richard II* について、Richard の没落の過程を “cascading from divine kingship to kingship’s ‘Name,’ and from the name to the naked misery of man”¹⁾ と述べ、また “*The Tragedy of King Richard II* is the Tragedy of King’s Two Bodies”²⁾ と定義付けをしている。しかしながら、Kantorowicz は著作の意図からいっても、伝統的な「王」についての様々な認識の枠の中に、*Richard II* を取り込んだものであって、Richard のあり方から分析していったものではないように思う。私は、Richard と「王」という名前の係わりの中で、この劇が観客を魅き付けてやまない Richard の成長をとらえてみたい。

II

Richard が「王」たることについて、どのような認識を抱いているかについては、劇の当初は明らかになっていない。Kantorowicz もその分析を第2幕以降から始めているが、Richard の成長という点からは、劇の前半での彼の状態に注目しなければならない。

この劇の始まりとともに、Richard は、さっそうと“王らしい”威厳に満ちた様子で登場する。しかし、この王らしさは、多くの批評家たちが指摘する様に、ceremony の生み出すものであって、Richard 自身の内面から生じたものではない。Richard の底の浅さは、他の登場人物との比較から容易に明確になってくる。

“王らしくみえる” 登場に引き続き、すぐに Gloucester 公夫人と Lancaster の会話の中で、叔父にあたる Gloucester 公殺害への関与という Richard の罪が暴露される。ここで、law を体現すべき「王」の要素が Richard にはないこともわかるが、ここで繰り返されるのは「王の神聖な血」という表現である。Lancaster は Richard の血の神聖さを十分に認識している。そして、Richard の中に、王たるべき状態——、personal body と political body の融合を実現しようとするのである。それが Lancaster の死の床での熱弁であろう。彼の言葉は辛辣で厳しいものではあるが、そ

これらの意図するところは、Richard の拒絶ではなく、警告なのである。York もまた Lancaster と同じ意識をもって行動する。

これに対して、全く別の認識の形で「王」をとらえた人物が Northumberland 伯である。Northumberland と Lancaster らとの決定的な違いは、Northumberland が、「王」という概念の中で、political body と personal body とを完全に分離して考えていたことである。Northumberland は、前者を守るためには、後者を切り捨てるべきだと考えて、

If then we shall shake off our slavish yoke,
 Imp out our drooping country's broken wing,
 Redeem from broking pawn the blemish'd crown,
 Wipe off the dust that hides our 'sceptre's gilt,
 And make high majesty look like itself,
 Away with me in post to Ravenspurgh.* (II. i. 291-6)

と言う。Northumberland の守ろうとしている majesty は「王」の majesty には違いないが、Richard のそれでないことは明らかである。彼は Richard を排斥することこそ、国を守り、「王」の威信を守ることとして捉えている。彼にとって、Richard はただ名目上の王であり、実質的な王ではない。Northumberland は王威を表すものとして、sceptre や crown というような metonymy を用いているが、これらのものはある個人に属するものではない。王からまた次の王へと引き継がれてゆくものである。これらのものを受け継ぐべき男を見つけることが、Northumberland にとって採るべき行動なのだ。

この二者の認識は大いに違ってはいるが、その共通点は、それが彼等の中で確固たる形をとっていることである。彼等は、その認識に基づいた行動を採る。Lancaster はその“正統”な認識ゆえに、Gloucester 夫人をなだめ、Bolingbroke の旅立ちを促し、最期の一瞬まで、Richard へ忠節を尽くすべく苦言を忘れない。また、Northumberland は、信念を貫くべく Bolingbroke を積極的に支援する。

これに対して、Richard の「王」についての認識は、まず最初は、いかにも曖昧なものである。その曖昧さは彼が何も考察することなく、ただ自分のあり方が逆に「王」というものを規定しているかの様な態度を採っていることによる。

Richard は自分の王位に何の懸念も抱いてはいないが、「王」という地位が、不滅のものであり得るのは、「王」の political body としての要素が、脈々と続く歴史の中で父祖から子孫へと引き継がれていくからこそであることに彼は気付かない。継続性にこそ王家の「血」の神聖さは依存しているのだ。ところが、Richard の回りには「血」のつながりが欠けている。

(奇妙なことに、歴史的事実からも、彼は王たるうえで濃い血の關係性を持っていない。すなわち、Richard は王位を父からではなく、祖父 Edward III から受け取ったのであり、父の不在は Richard の王位の線的な継続性の薄さを感じさせるのだ。) この劇を通じて、Richard の息子についての言及が見られない事は、Bolingbroke が父 Lancaster と息子 Hal とも強い絆で結ばれているのと対照的である。それ以上に、Richard には、先に見たように自分自身の属する王家の血の積極的な否定者という要素がある。さらに、Northumberland は、Richard が王家だけでなく、他の貴族達の血筋の継続性を脅かしていることを指摘する。

..... what they will inform,
 Merely in hate, 'gainst any of us all,
 That will the king severely prosecute
 'Gainst us, our lives, our children, and our heirs. (II. i. 242-245)

事実、Richard は Lancaster から Bolingbroke への継続を断とうとした。Northumberland と正反対の認識を持つ York の台詞でも、Richard が正しい時の流れを妨げていることが明らかである。

Take Herford's rights away, and take from time
 His charters, and his customary rights;

Let not to-morrow then ensue to-day :
 Be not thyself. For how art thou a king
 But by fair sequence and succession? (II. i. 195-199)

Richard が「王」の血の否定の罪を犯すに至った動機—それは、王位の保全なのである。Richard が自分の王位の基礎ともいべき己の血筋を否定することによって、王位を守ろうとしたところに詭弁がある。これと全く同じ論法を展開して Richard は、国土の賃貸を行った。王としてアイルランド侵略への備えと戦費の捻出をする、という大義名分をもって、それは行われたが、王として守るべき国土を維持することを放棄したうえでの戦いとは何なのか。Richard が王として採ったこうした行動は全て、逆に王位の崩壊につながっている。それは Richard が「王」とは何か、自分が何物であるかを顧みていないことの現れであろう。つまり、Richard の認識は Lancaster とも Northumberland とも異質のものである、というよりも、彼は認識にまるで欠けているのである。

Richard の没落の原因である罪の業は、彼の信念を体現すべき行動として呈示されないで、劇の中で narrative に片付けられてしまっているが、それは Richard に確固たる認識が何もないためである。Northumberland や Lancaster が各々の認識に基づく行動をとるのに比して、この前半部においては Richard の存在感の無さが強調されており、Richard は曖昧な存在として観客の目に映る。

この劇の前半部において、このようにいくつかの型の王にまつわる認識が現れ、その中で Richard の浅薄な思考とその内的な混迷とが明らかとなったとき、Richard の落ちてゆくべき道がはっきりと見えてくるように思われる。そして、この劇の後半は予想通りに Richard は落ちてゆくが、と同時に Richard は不思議な過程で高みへと昇ってもいくのである。

III

第3幕に入り、事態の急変と共に Richard の言葉が急に輝きを増し始め、
 他を圧倒しながら Richard は、前半で誰の内にも見られなかった認識に達
 し、Northumberland 等とも York, Lancaster 等とも次元の違ったところ
 へと進んでいく。これからは、その過程を追っていこう。

Bolingbroke 帰国の知らせにより、出征先のアイルランドから取って返
 した Richard は祖国への愛情を高らかに歌い上げる。

Needs must I like it well: I weep for joy
 To stand upon my kingdom once again.
 Dear earth, I do salute thee with my hand,
 Though rebels wound thee with their horses' hoofs.
 As a long-parted mother with her child
 Plays fondly with her tears and smiles in meeting,
 So weeping, smiling, greet I thee, my earth,
 And do thee favours with my royal hands;
 Feed not thy sovereign's foe, my gentle earth. . . (III. ii. 4-12)

Gupta はこの Richard の急激な変貌の中に整合性を見出せず、この劇の欠
 点としてとらえた。³⁾ しかし、ここに始まる甘美な言葉は、Richard が意
 識的に物事をとらえようという姿勢の芽生えと呼応していると言えるので
 はないだろうか。

Richard を取り巻く状況は絶望的である。Richard が天に頼り、王の不
 可侵性を述べる時、それは一見、自分の王座への楽天的な確信のように
 聞こえてしまう。しかし、Richard は、実際には、天使ではなく Wales 人
 の軍隊や York の軍隊がすべてを決定する要因であることを十分に理解し
 ている。彼の台詞は誰かに話かけて同意を求めているものではなく、言葉
 によって自信を取り戻そうという潜在的な意思を示しているように思われ
 る。

「王」という名前は、「王であること」に付随する重みとの間で釣り合いのとれているべきものである。この釣り合いは既に第1, 2幕で完全に損なわれているのだが, Richard にとっては, 第3幕が, 自分が実質的な王として必要なものを失ったことを認める最初の場面である。Richard の言葉は, まるで自分に唯一残された「王」という名前と釣り合いを取ろうとするように, 大げさで華々しい。彼の言葉が輝く程, 彼の失ったものの重みが, 観客には伝わってくるのである。

Richard の言葉に應える Carlisle の “Fear not, my lord” という言葉からも Richard の台詞が彼の不安の裏返しであることが伺える。この場面で Richard は自分の名前に次のように呼び掛ける。

I had forgot myself, am I not king?

Awake, thou coward majesty! thou sleepest.

Is not the king's name twenty thousand names?

Arm, arm, my name!

(III. ii. 83-86)

Kantorowicz の言葉を借りれば “half-reality, royal-oblivion”⁴⁾ というこの状態から目覚め, 現実が絶望的であることを明らかに知るにつれて, Richard は次第に「王」を名乗ってきた者達と「死」の切り離せない関係に目を向け始める。

For God's sake let us sit upon the ground

And tell sad stories of the death of kings:

How some have been depos'd, some slain in war,

Some haunted by the ghosts they have deposed,

Some poisoned by their wives, some sleeping kill'd,

All murdered.

(III. ii. 155-160)

更に York の軍勢も失われた後, 続いて Bolingbroke や Northumberland と対決する頃には, 「死」は, 一般論を越えて Richard 自身のものとしてとらえられている。

I'll give my jewels for a set of beads;
 My gorgeous palace for a hermitage;
 My gay apparel for an almsman's gown;
 My figur'd goblets for a dish of wood;
 My sceptre for a palmer's walking staff;
 My subjects for a pair of carved saints,
 And my large kingdom for a little grave,
 A little little grave, an obscure grave. (III. iii. 147-154)

ここで繰り返された“my”という言葉の中にそのことがよく伺える。

先に、王についての不滅や神性を唱えた Richard だったが、それゆえに Richard 死の影は一層濃くなっている。あらかじめ滅びを覚悟している「普通の」人間以上に、不滅を盲信していたこの王にとって、それは測り知れない苦悩に満ちた認識であるに違いない。

我々は、今や Richard が、Northumberland や、Lancaster らのような形ではないにせよ、「王」たることを考え始めたことを知るのである。

次に、Bolingbroke と対面した Richard は彼の尽くす札に対して “Up, cousin, up; your heart is up, I know, / Thus high at least, although your knee be low” (III. iv. 194-195) と述べる。Bolingbroke の態度は、己の権力への欲望を漏らさぬように巧みに取り繕われている。彼は、実質上の権力を手に入れるやいなや、かつての Richard と類似の状態になってしまっている。Bolingbroke のとる行動は、彼の言葉とは一致しないし、彼の言葉は、彼の内面、本心を表すことはできない。一方、Richard はと言えば、直載に思いのたけを述べるようになり、先の曖昧さの代わりに、力を備えるようになっている。上の台詞に伴う手振り一つで Bolingbroke の偽善を暴露する力があるのだ。前半での曖昧な状態はもう Bolingbroke に譲り渡したのだ。

この Richard の優位は、彼の退位の場面で一層明らかになる。退位の儀式は Richard にただ一つ残された「王」という名前を奪うことである。伝統的な考えからいえば、Richard と「王」という名を引き裂けるのは、

Richard ただ一人なのであるが、現実には、Bolingbroke の命ずるがままの行動をとらねばならない状況である。ところが、この場面は Richard が取りしきっている。

Now, mark me how I will undo myself.
 I give this heavy weight from off my head,
 And this unwieldy sceptre from my hand,
 The pride of kingly sway from out my heart ;
 With mine own tears I wash away my balm,
 With mine own hands I give away my crown,
 With mine own tongue deny my sacred state,
 With mine own breath release all duteous oaths. (IV. i. 203-210)

Pater のいう, “Inverted rite”⁵⁾ によって、一つ、また一つと, Richard は王としての属性を捨てていき、遂には、彼に「王」という名前に決定的に別れを告げる。

最後に Richard は一瞬散文的な台詞に戻る: “What more remains?” 自分の退位の儀式を精一杯演じた事に満足して“これでどうだ”と言っているようなこの一行である。ところが、この素晴らしいパフォーマンスに対する Northumberland の反応は、Richard に自らの弾劾文を読むようにと要求することだ。Northumberland はあくまでも政治的なレベルにこだわっている。この Northumberland の台詞に対して Richard の悲しみは爆発する。先のパフォーマンスが受け入れられなかった結果、Richard は、勢い、内へ内へと向かうしかない。

No lord of thine, thou haught insulting man ;
 Nor no man's lord. I have no name, no title ;
 No, not that name was given me at the font,
 But 'tis usurp'd. Alack the heavy day,
 That I have worn so many winters out,
 And know not now what name to call myself ! (IV. i. 254-259)

今 Richard から離れていったのは、「王」という名前であって、Richard という名前ではないはずだが、彼の意識のなかでは「王」という名前と共に自分の全存在が消滅したのである。ところが Richard は鏡のなかに、以前に変わらぬ自分の顔を見出し、鏡を割るという行動をおこす。この動作の中で Richard は、己の内面を欺くすべてのものを拒絶しようとする。そして、魂のなかの嘆きこそが彼に残された、最後の確かなものだという認識に至る。

And these external manners of lament
Are merely shadows to the unseen grief
That swells with silence in the tortur'd soul. (IV. i. 296-8)

Richard のパフォーマンスは、何か確固たる物を演じるというより、そのパフォーマンスの過程の中で、Richard が意識を深めていくところに意味があるように思われる。それは「王」であることを必死に保とうとして言葉を操りながら、その間に「王」たることについて意識していくのと同じパターンである。

我々が、Richard の言葉の豊かさに触れるとき、我々と同様に Richard のパフォーマンスの観客であるはずの他の登場人物達が、誰一人として、Richard の必死のパフォーマンスに応える能力を備えていないことが強く印象付けられてしまう。前半では、確固たる認識に基づいて行動しているという意味で、Richard より遙かに魅力的だった諸卿達だが、ここで言葉の大いなる力に動かされることなく、Richard が自然に吐露した激しい苦悩にも反応を示さないで、自分達の認識の殻の内にこもっているのを見ると、それは精神的な硬化、不毛として、観客の目に映るのである。つまり Richard の言葉が豊かな分だけ、我々は、Richard と共に彼の世界に入っていく行き易く、他の人物を否定的に見てしまう。今、悲しみと苦悩の認識のだけしかないことを理解した Richard は、まさに“naked misery of man”のどん底に“我々の代表”として存在している。我々観客と他の劇中人物達の間にある沈黙は「金」ではなく、「無」なのである。

IV

強い力で、Richard の内面の世界に引きずり込まれた我々は、第5幕に入ると、うって変わった静かな境地を見出す。Manheim は、“nothing really changes in Richard’s responses following III. 2”⁶⁾と述べているが、Richard が「王」という名前を持っている間と失った今とでは大きな変化がある。「王」という名を捨てる時に要した大きなエネルギーの放出が安らぎにも似た状態を生んでいる。

「王」という名前も失って、自分の中の苦悩だけが real なものであり、それは最早誰の手も届かぬものであることを知った Richard にとっては、失うべきものは何もなく、喪失の不安は遠のいたのだ。

Richard と王妃の別れの場面で、Richard は、王妃に対して、初めて優しい愛情の言葉を発する。Northumberland への言葉も、前の場面で爆発した呪咀とは異なり、「予言」と呼ぶにふさわしい落ち着いた調子を備えている。相も変わらず practical なことに終始する Northumberland は、もはや、Richard とは別個の世界の住人である。

このままの調子で、Pomfret 城での独白に続いて死を迎える。

彼は、thought について思いを巡らす。

... no thought is contented. The better sort,
As thoughts of things divine, are intermix'd
With scruples, and do set the word itself
Against the word. (V. v. 11-14)

彼は、思想が“flatter”することに気付き、こう述べる。

Thoughts tending to content flatter themselves
That they are not the first of fortune’s slaves,
Nor shall not be the last—like silly beggars
Who, sitting in the stocks, refuge their shame,
That many have and others must sit there;
And in this thought they find a kind of ease, (V. v. 23-27)

こうしてみると、Richard が自己認識の過程においてすばらしい言葉で行ってきたことは、一面においては、自ら言葉で自らを“flatter”したこともあるのではないかということが思い浮かぶ。

確かに“flatter”という言葉は critical な状況で強いインパクトを有す言葉であった。まず前半では flatterers によって、自分を見失った Richard の姿があり、後半に入ると、いかんともしがたい現実を取り繕い慰めることを“flatter”と見なして拒絶する Richard がおり (III. ii.), 次に内面を表し得ぬ鏡を“flatter”するものと捕らえて粉碎した。

“flatter”する事は、偽りの美しさを呈することであるから Richard は言葉に頼っている限り、真に認識を深めたとは言えないであろう。今まで大いなる力を発して、Richard を導き、Richard と共に観客を、導いた言葉を捨ててこそ、本当の成長があるのである。

「王」という名前を捨てた今の「無になるまで満足できない」という捉え方は、鏡を割ることで得た「苦惱だけがリアルなものである」という意識を深めたものといえる。Richard は華麗な言葉を発することで認識を深めてきたのだが、今や、その言葉から離れるべき時が来たのである。

そして、Richard は言葉から離れた。Richard が最期にしたことは、言葉による保身ではない。他の劇において、犠牲者が暗殺者に対して、言葉によって暗殺者のかたくな心を和らげ、助命を嘆願するのは正反対に、Richard はただ剣を取って戦うのである。これが Richard の採った最初で最後の行動らしい行動である。あれほど、言葉にのめり込んでいる様だった Richard が言葉には頼ろうとしなかったことには大きな意味があるだろう。それは王であろうと、乞食であろうと、そんなことは無意味であって、言葉を以って思想の砦のなかに閉じこもるのは、自らを“flatter”して欺くことになる、という最終的な認識をそのまま体現した行動だといえるのではないだろうか。

V

こうして我等の Richard は死ぬ。その死の刹那に、彼は何も持たず、沈黙して往った。「王」という名前と共に王笏も王冠も Bolingbroke に呉れてやったとき、政治的な意味の「王」としての枠組からは確かにはみだしてしまった。しかし、その代わりに、その失うものの偉大さゆえに大きな苦しみを体験したその代償として、一人の人間として確固たる認識を得たのが Richard の最後の姿である。Richard が死に際して、自分が「王」であるという確信を取り戻した瞬間、彼が、どういう形でそう思ったのかにかかわらず、観客は、これに賛同できる。少なくとも、Richard は完全に自分の理解にのっとって、自らを御し得るまでに成長したのだから。現代の観客にとっては、「王」という称号は、イギリス国王としての意味合いだけでなく、真に人間らしく完成された人に対して捧げたいものなのである。我々が、そして、Richard が「王」としての確信を得るために肉体も減んで無に帰すことが必要であったということが、大きな感銘となって残るのである。

注

*引用はすべて *The Arden Shakespeare: King Richard II*, ed. Peter Ure (London: Methuen, 1956) による。

1) Earnst H. Kantorowicz, *The King's Two Bodies* (Princeton; Princeton Univ. Press, 1957), p. 27.

2) *Ibid.*, p. 26.

3) S. C. Sen Gupta, *Shakespeare's Historical Plays* (London; Oxford Univ. Press, 1964).

4) Kantorowicz, p. 29.

5) Walter Pater, *Appreciations* (London; Macmillan, 1895), p. 205.

6) Michael Manheim, *The Weak King Dilemma* (New York; Syracuse Univ. Press, 1973), p. 210.